

研究ノート：

授業に関するアンケートから考えられる学生の 授業の取り組み方

*伊原 道代・*和田 芳

(2017年12月27日受理)

Student Attitudes toward Classes Based on Questionnaire

Michiyo IHARA, Kaori WADA

Key words：ピアノ教育 ピアノ学習 練習 授業

1. はじめに

保育士にとって「ピアノを弾く」ということは、特に高い専門性が求められる。そのため、学生の中には苦手意識を持っていて幼稚園実習などでピアノを“弾かされる”ことに恐怖を感じている者が少なくない。

本学の学生は、「ピアノを弾く」ことを週1回行われる「器楽」という授業の中で学ぶ。この授業は、保育現場で必要なピアノ演奏や弾き歌いの技能の基礎を身につけることを目的としていて、全体授業で曲の解説を聞き、その後の個人レッスンで各自の練習が身についているかを確認する。

本稿では、2016年と2017年に実施した学生へのアンケート結果から、2回生は1年間の授業を通してどのように授業に取り組み、どのように成果を感じているのか、そして1回生は、授業を受けた後のピアノの自己練習においてどのような問題点を感じているかを考えてみたい。

2. 器楽Ⅰについて

本授業は、先にも述べたとおり保育現場で必要なピアノの演奏技能を身につけることを目的としている。到達目標として、

- 正確な読譜ができる
- スムーズな運指による正確なリズム表現ができる
- 作品のテンポと適切な音楽の流れが把握できる
- 歌詞の正しい発音ができる
- 子供たちや保護者らに対して演奏ができる
- 歌詞に込められた意味を理解し、歌詞の内容が伝わるように表現できる
- 子供の声を受け止め、子供と共感して表現の喜びを共有することができる
- 演奏開始に際しての歌い出しの合図ができることを掲げている。

この到達目標はピアノ学習経験の有無を問わず全ての学生が共通して目指すものである。

3. 2016年度の器楽Ⅰ アンケート調査

2016年4月に幼児教育学科1回生85名に対して、器楽Ⅰの授業を始めるにあたり、予め各自の経験の有無をアンケート調査した。アンケートの内容は次の通りである。

1. あなたはこれまでにピアノを習った事がありますか？
 2. 習った期間を教えてください。
- まず1. のピアノを習った事があるか、の問いに対

*仁愛女子短期大学 非常勤講師

する答えとして

現在習っている学生は34% 過去に習ったことがあるは39%、最後に一度も習ったことがないは27%なのがあった。

図1は、ピアノの経験期間を示した。経験期間が短い学生が多いのわかる。

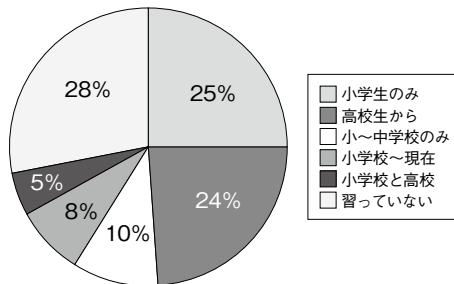


図1 ピアノの経験期間

3. 習っている時に使用したテキストは何ですか？

最も多いのはバイエルで41%の学生が使用している。これは1回生が1～3グレードで使用する「おとなのピアノレッスン」の内容とほぼ同じ内容になっている。次にブルグミュラーの21%、ツェルニー100番30番の9%、ソナチネの14%、ソナタの6%となっている。

4. 楽譜が読めますか？

この問いに対して読めると答えた学生は25%、だいたい読めるは42%、そしてあまり読めないは20%、ほとんど読めないは13%となっている。

1. の経験の有無に照らし合わせると、未経験者で過去に習ったことがなくても楽譜が読める学生がいる反面、過去に習っていても読譜できないと感じている学生がいることがわかる。

5. 両手で弾けますか？

両手で弾けるのは62%、片手なら弾けるのは18%、ほとんど弾けないのは20%となっている。前項目の読譜力と同じく1. の経験の有無に照らし合わせると、未経験者でも弾けると答える学生がいる一方で、過去に経験があっても両手で弾けないと答える学生がいるのわかる。

6. 自宅、もしくはマンションでピアノの練習が出来ますか？

これはほとんどの学生が出来る（92%）と答えた。たとえ出来ない学生がいても短大にはピアノ

の練習室が27室あり、アップライトピアノやグランドピアノを自由に使えるようになっている。

7. あなたが持っている鍵盤楽器を教えてください。

最も多いのはピアノで45%、次に電子ピアノの34%、次にキーボードの21%、エレクトーンの5%となっていて、複数の楽器を所持している学生が5%いることがわかる。

この実態を踏まえて各々のレベルにあったグレードを決めて一年間授業を受けている。

4. 1年後の器楽Ⅰに関するアンケート調査

次に学生が一年間の授業を通してどのように成果を感じているか、調査してみた。

2017年10月の中旬にかけて本専攻2回生に対して、器楽Ⅰの授業に関するアンケートを行った。当日欠席の学生もいたが70名の回答が得られた。アンケートの内容は次の通りである。

1. あなたは1回生の時何グレードでしたか？

2. 授業を受けるにあたり週にどれ位練習しましたか？

この質問に対して毎日、ほぼ毎日と答えた学生は33%、前の日に練習したが一番多く61%で、あまりしなかったと答えたのは6%となった。

次に練習した時間はどれ位でしたか？の問いには10～30分練習した学生が42%、30～60分が43%いて、60分以上は15%となった。

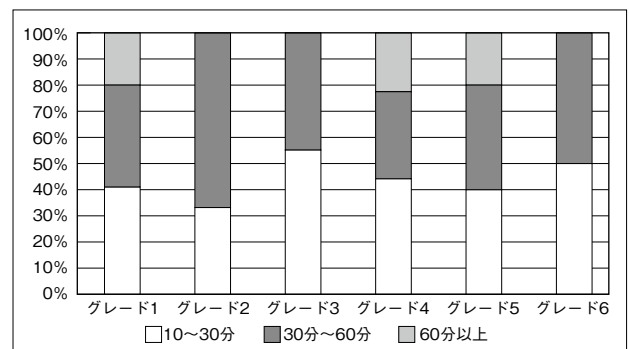


図2 グレード別練習時間の割合

図2は、グレード別練習時間の割合を出した。グレード1で、60分以上と答えている学生がいるのわかる。ピアノの練習は慣れていないと大変時間がかかるものだ。これを見るとやはりある程度の時間

がかかっているのがわかる。

3. 練習した場所はおもにどこでしたか？

一番多いのがおもに自宅と答えた57%で、次に自宅と学校と答えた34%で、おもに学校と答えた学生は9%いた。

4. 入学前にピアノを習っていたかどうかを聞きましたが、その後についてお答えください。

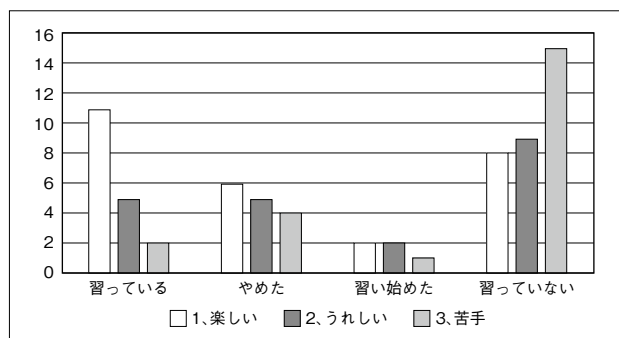


図3 レッソンの有無における感想

そのまま習っている学生は26%いて、習い始めたの項目の7%を足すと33%の学生が習っている現状だが、やはり習っていないと答えた46%、そして習うのをやめたと答えた7%を足した67%の学生は自分の力で学習していることになる。図3は、レッスンの有無における感想（アンケート6）の人数を出した。楽しく習っている傾向と苦手だから習っていないという傾向が見えた。

5. 一年間授業を受けて楽譜は読めるようになりましたか？

だいたい読めると、読めるをあわせると87%の学生がクリア出来ているが、苦手意識の9%とあまり読めないの4%の学生がいるが、苦手意識はなかなか減らないようだ。図4は、グレード別読譜力の割合

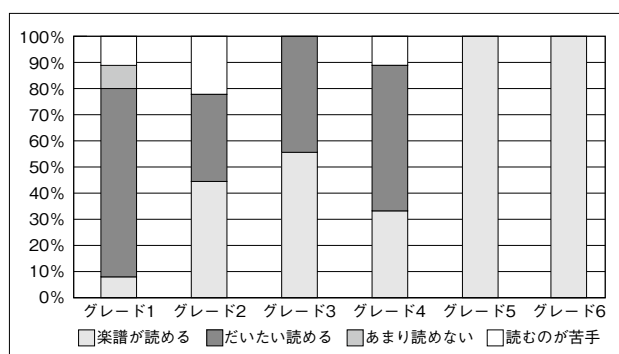


図4 グレード別読譜力の割合

合を出した。グレード1、2、4の学生が、苦手と答えているのがわかる。

6. 一年間授業を受けての感想は？

楽しく授業を受けられたとの感想は39%で、両手で弾けるようになりうれしいとの感想は30%いたのに対して、相変わらず苦手に思うとの感想は31%となった。

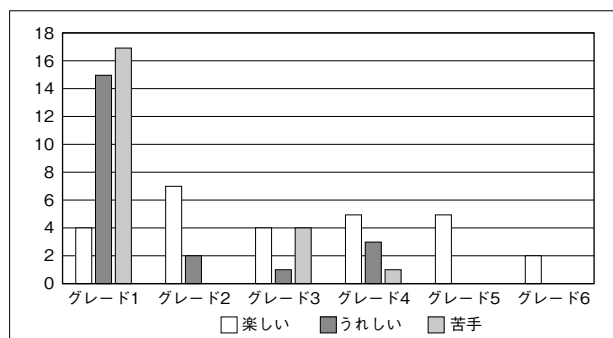


図5 グレード別の感想

図5は、グレード別に感想をまとめてみた。1グレードの学生が、やはり苦手意識が高いという数字が出た。しかし、同じ1グレードの中で、「楽しく授業が受けられた」と余裕のある学生もいるし、「両手で弾けてうれしい」と言う満足感のある学生もいて、それらを合わせると苦手意識者よりも多いことがわかる。これは、ピアノが弾けるという自信にもつながり、将来的にはどんどん自分で弾きたい曲を見つけて弾きこなせる基本的な力をつけたことになり、一応の成果があったと思われる。逆に、3、4グレードの学生は、かつて習ったことがあるにもかかわらず「相変わらず苦手に思う」と感じてしまうのは、読譜が苦手だったり指が動かなかったり、リズムがとれなかつたり、それらをクリアするための十分な練習時間を積んでいないように思われる。今回のアンケートでは、グレードと練習時間の関係で1グレードの学生が時間をたくさんかけている傾向が見受けられた。苦手としている学生ほど練習時間は必要となるので、苦手意識の内容を分析して学生に的確な指導をする必要性も感じられた。

最後に自由記述に書かれた感想を書き出す。

*「やれば出来る！」とピアノを通して思うことができました

- * 弾けるようになってからは楽しいと感じる時が増えた
- * 知らない歌をどんどん知れて、それが弾けることが嬉しい
- * 人前で弾くのはまだ緊張します
- * アルバイトが忙しいのであまり練習できない
- * 先生によって注意する所も違い大変な時もあるけど、振り返ればよかったかなと思うところもあります
- * 楽譜を読んで1曲2曲と完成させられるのが嬉しかった。楽譜が読めなかったのに読めるようになった
- * 2回生になってからピアノが好きになった
- * ピアノに対する苦手意識は減ったけど楽譜を読むのがまだ苦手です
- * 子どもたちが歌える曲のレパートリーが増えて嬉しいです
- * 弾けるようになるまでに時間はかかるけど、弾けると楽しいです
- * 弾ける曲が増えていくのがうれしいです
- * 先生やさしいです
- * 求められることが多くて大変です
- * 実習でピアノの大切さを感じ、授業があるから頑張れている所もあります
- * いろんな曲を弾き、レパートリーが増えました。童謡も弾けてとても楽しかったです
- * 弾きがたりはやっていて楽しい

1年間の授業を終えて、学生が達成感を味わえているのが分かった。反面やはり苦手意識が残る結果もでている。そして学生達が楽しいと感じていても実際のピアノ演奏に結びつかないことが多いのも事実だと感じる。感情を出すことに慣れていない面が多々あるようにみえるし、折角上達しても自信がないので人の前で力量が発揮できていないと感じることも多い。いかに音楽が楽しいかを伝えるには自分がそう感じているだけでなく積極的に感情を出せる能力も必要と感じる。

5. 2017年度器楽Ⅰ アンケート調査

2017年度も、授業に入る前に新1回生に対して個々のレベルに合わせたグレードに分けるため、ピアノ学習や楽器演奏経験の有無などを尋ねたアンケートを実施した。このアンケートを元に学生から直接話を聞いたり実際に演奏を聴くなどして、今年度はグレードの数を減らして新しく3つに振り分けた。その結果、未経験者を含む初心者（1グレード）は全体の58%、初級者（2グレード）は30%、中～上級者（3グレード）は12%であった。1グレードの中でも、特に学習未経験者が到達目標全てをできるようにするのは大変な苦労があるようだが、卒業までに最低でも、到達目標の

- ・正確な読譜ができて
- ・スムーズな運指による正確なリズム表現ができて
- ・作品のテンポと適切な音楽の流れを把握するといったピアノ演奏の基礎を身につければ、現場で自信を持って臨むことは難しい。

最初の授業から半月経った10月に、同じく1回生に対して「ピアノの自己練習」についてアンケートを再度実施、106名の学生から回答があった。全8つの設問のなかから主な設問項目を記す。

1. 授業を受けるにあたり、週にどれくらい練習しますか。
2. 練習していて苦手だと感じることはありますか。あるとすれば、それはどんなことですか。
3. レッスンの時、または自分で練習するとき、弾けるようになるためにどのような方法を試しましたか。
4. 3. のような工夫をして取り組んだ結果、「弾けるようになった」等の手応えは感じられましたか。

図6は、学生が1週間に行う自己練習時間を表したものである。授業を受けるにあたり、47名の学生が毎日、または、ほぼ毎日練習していることがわかる。授業の前日に練習するという回答は、大半がピアノ学習経験のある学生からであったが、興味深いのは、ピアノ未経験にもかかわらず授業前日に練習するいわゆる“一夜漬け”タイプの強者もいるということだった。

	1グレード	2グレード	3グレード
片手ずつ弾きながら音符を歌う	26	19	9
左手を弾きながら右手のメロディーを歌う	5	5	3
難しい箇所をスムーズになるまで弾く	9	0	4
拍をとりながらリズムを言う、又はたたく	7	4	5
片手ずつ弾いて何回も合わせる	11	5	2
ゆっくり練習する	6	0	0
音符歌いをする	6	4	3
YOU TUBEで聴く	7	0	0
曲を聴いて覚えて弾く	1	0	0

(複数回答あり 単位：名)

図8 レッソンの時、または自分で練習するとき、弾けるようになるためにどのような方法を試しましたか？

るのだ。

このアンケートでは、実際にその練習方法で行った結果、有効であったか、また、それ以外に自分なりの方法があるかも併せて尋ねた。

図8に示したように、どのグレードの学生も「片手ずつ弾きながら音符を歌う」ことを試していることがわかる。実際の個人レッスンでも、1グレードの学生に弾けない部分2小節をまず音符を数回読んでもらい、その後「片手ずつ弾きながら音符を歌う」ことを試してから両手で弾くことを繰り返してもらった。時間にして3分ほどだったが結果弾けるようになり、それを学生自身が効果を感じ、その後の自己練習でも工夫を重ねるうち目に見えて「弾けた！」を実感できたようだ。

そのほか学生独自の取り組み方として「曲をYOU TUBEで聴く」という回答があった。音楽を聴くだけでなくどうやって弾くかを指南してくれるような動画もあるようで、今の時代の学生らしい答えである。なんとかして弾けるようになりたいという学生の一生懸命さが伝わる回答で微笑ましく感じたが、そればかりでなく、自分でどんな曲なのかを考えて弾けるようにするという地道な練習も取り入れて、弾けたときの大きな喜びも体感してほしいと思う。

保育現場では、聴いたことがない新しい曲、CD等の音源がない曲、主旋律しか書いていない曲など「大変な楽譜」を扱うことも多く、「他」を頼ることができない場合もあろう。そんなとき役立つのは、自分の知識と演奏技能なのである。

6. まとめ、アンケート結果から思うこと

今年度、器楽授業はピアノ演奏重視のやり方から保育現場で扱う曲のレベルに合わせた教材の変革、それに伴うグレードのあり方を見直し実施している。1回生で行う「器楽Ⅰ」は公務員試験で扱われるバイエル曲を中心に3つのグレードに分け基本的な演奏技能を高めること、そして2回生で行う「器楽Ⅱ」の授業で弾き歌いの曲を増やすなど、より現場を重視した内容になった。

今回のアンケートは現1、2回生に対してのみ行われたものもあり、これからも継続して調査することでより詳しく学生の授業の取り組み方を読み解くことができると期待しているが、まずは、ピアノ学習の経験がある学生もない学生も、毎日の練習ができていない学生も、どのレベルの学生も、思いの強さの差はあれ自分なりになんとかして弾けるようになりたいと向上心を持って授業に取り組んでいることを結果から読み取ることができた。

「ピアノを弾く」ことは目に見えて上達が感じられることが少なく、学生の言葉を借りれば「心が折れる」ことがたびたびあろうと思う。だが幼児教育としての音楽は、本来、曲の良さや楽しさを自らが感じ、子供たちに伝え、ともに共有することであり、「ピアノを弾く」ことはそれらを表現する手段なのである。学生には、このことを忘れることなく技能のレベルアップを図ってほしいと切に願う。そして私たち教員は、時代に即した授業のあり方を考え、今の学生にとっていかにしたら良い方向性を示せる授業が実現できるかを日々研究し行っていくことが大切であると考えます。

引用文献

- 1) 古屋晋一 (2012)『ピアニストの脳を科学する 超絶技巧のメカニズム』春秋社